

古くから日本人を魅了してきた

銅が彩る 青い花火



東都両国夕涼之図(両国花火資料館所蔵)
【出典:『令和元年 夏 花火入門』公益社団法人日本煙火協会発行】

一面青く染まった千輪扇打ち。青い花火はコンテスト入賞作品の常連となっている。
(2018年フォトコンテスト金賞「全部青い」第67回津花火大会2018)
【出典:公益社団法人日本煙火協会HP】

金属を利用して花火はいつきに華やかに

轟音とともに夜空にぱっと大輪の花を咲かせ、キラキラと美しく消え散る花火は、儚さゆえか日本人には欠かせない夏の風物詩である。

花火の歴史をひもとくと、日本には16世紀の鉄砲伝来とともに花火の原料となる黒色火薬が海外から伝わり、鉄砲や合戦の合図である「のろし」に使用された。遊びや観賞用の花火が登場したのは江戸時代に入ってからで、江戸で活躍した大名が花火を披露し人気を博した。そして、花火の魅力は庶民にも広まり大流行に。おもに隅田川の河口部で花火が行われていたが、17世紀には両国橋周辺が花火の名所となった。19世紀には花火の技術が大きく発達し、当時の花火の様子は浮世絵にも描かれている。この頃活躍した花火師が有名な鍵屋弥兵衛や玉屋市郎兵衛で、「カギヤ〜」、「タマヤ〜」という掛け声にその屋号が残っている。

それまで黒色火薬を使用した花火は、橙色一色であったが、この花火が色付き始めたのが明治時代、産業革命とともにさまざまな金属や酸化剤が輸入され、明るく豊かな色彩が実現した。黄色はナトリウム、紅色はストロンチウム、緑色はバリウム、そして青色をつくるのは銅。この4つの金属元素の炎色反応を利用することで、多彩な色と濃淡をつくり出すことができる。またマグネシウムやアルミニウム、チタンなどは、まばゆい輝きやゆっくりと儚く散る光など、色以外の効果に利用されている。金属を利用することで、花火はいつきに華やかに、鮮やかに、表情豊かなものへと、発展していったのである。

日本人を魅了してきた青い花火

「さまざまな色彩の花火がありますが、なかでも日本人が昔からずっと好んできたのが青色の花火です。最近のコンテストでも青色の花火は入賞作品の常連です」公益社団法人日本煙火協会の河野専務理事はこう話す。

現在、花火の青色を作り出しているのは酸化銅。かつては緑青が利用されてきた。

「やはり日本人にとって花火は『納涼』や『暑気払い』としての意味合いが強いため、日本人にとって銅がつくりだす青色はすーっと心が落ち着くのでしょう」。

最近、花火は新しい技術が積極的に導入され、コンピュータで1/100秒の間隔でタイミングを制御して打ち上げることが可能となっている。音楽やレーザーと組み合わせ、総合エンターテインメントとして発展するなかで、問われるのはセンス。30~40代の花火師が多く活躍しており、20代の若い花火師もいるという。常に新しいことに挑戦していけるため、魅力を感じて花火師を志す若者は多い。新しい表現方法を取り入れながらも、人気の高い花火は長く大切に残している。まさに青色の花火は過去から現在、未来にかけて、姿を華麗に変えながらも、いつまでも日本人の心に美しい花を咲かし続けるのだろう。



公益社団法人日本煙火協会
専務理事 河野 晴行氏